

# 持続可能な社会の探究 I 生命・医療・衛生

保健体育科 佐藤 健太  
理科（生物） 葛西 陽菜

## 1. はじめに

本講座では、生命・医療・衛生に関連するグローバルな諸課題について探究活動を行った。そのため生徒の設定したテーマは多岐にわたり、主に1学期には、生徒が各自のテーマだけでなく、健康と生活習慣・生命倫理・疾患とその支援・保健医療・公衆衛生に関して幅広く見聞を広め、多角的な視点で探究活動を実践できるよう、フィールドワーク（FW）や大学教員、専門家による講義を複数回企画して支援した。具体的にはお茶の水女子大学の飯田薫子准教授による「生活習慣病」、同大学の沼部博直教授による「遺伝カウンセリング」、JICA 国際協力員の萩原明子氏による「途上国における母子保健・母子栄養改善の協力」の講義を実施し、基礎的な知識から最近の研究や活動まで、学びを深めた。FWでは、まず5月に国立国際医療研究センターを訪問し、医師・看護師やスタッフからのレクチャーに加え、診察室や分娩室の見学も行った。7月には希望者を対象に東京大学医科学研究所および隣接する近代医科学資料館を訪問し、東京大学の内丸薫教授による HTLV-1（ヒト T 細胞白血病ウイルス I 型）の感染によって起こる ATL（成人 T 細胞白血病）の研究についての講義に加え、研究室や資料館の見学を行った。またそれぞれの講義や FW の翌週には、学んだ内容に基づく生徒間の意見交換の場を設けて言語活動の機会を多数確保し、話す力、聞く力、伝える力の育成を図った。

このように生徒は、自分の探究テーマとは直接関連がない内容の講義や FW にも参加する中で、グローバルな諸課題はどこかで互いにつながりあっていること、ひとつの課題を多角的に捉えることの重要性を理解していった。

2学期以降は、1学期の学習をふまえ探究テーマの具体化や修正を行い、テーマに関連した情報収集や調査（FW、インターネット、書籍、新聞、アンケート等）を実施した。またそこから得られた情報や知識をまとめ、課題解決のためにどのようにアプローチするのか、考察を深めた。冬休みには「プレ論文」を作成し、これまでの探究成果を客観的に見直し、今後の探究活動の方向性や効果的なまとめ方を試行錯誤する機会とした。

なお、6月と11月に同領域の「経済発展と環境」講座と合同で行なった中間報告会（6月は5月のFWの報告、11月はそれまでの探究成果の中間報告）では、全員が発表者としてプレゼンテーション、および聞き手として助言や評価等の活動に取り組んだ。

3学期には年間の探究活動の総まとめとして、冬休みの「プレ論文」を基に各自が論文を執筆したほか、成果物の作成・制作に取り組み、それらを互いに発表した。発

表会では相互の探究活動についての成果や内容に対する評価もあわせて実施し、情報を共有した。

## 2. 本時の活動

午前の部 2年生「持続可能な社会の探究Ⅰ」の各講座代表生徒による成果発表  
(本講座代表テーマ「心の不調を抱え込まない社会を目指して」)

午後の部 講座ごとに分かれて、探究活動の進め方に関する1・2年生意見交換  
なお、午後の部の参加者は、2年生 本講座受講者19名、1年生 次年度本講座受講者21名であった。午後の部の流れは以下の①～③の通りである。

- ① 2年生代表グループによる探究のプロセスと成果の発表  
「お茶高生と考える出生前診断」「ヘアドネーション」「臓器移植の意思表示の重要性」
- ② 1・2年生意見交換(探究活動の心得の伝達)  
1・2年生混合の7～8人ずつ6班を編成し、各班ごとに15分間×2タームの意見交換(タームごとにメンバーを入れ替えた)を行なった。その際、2年生は1年生へ4つの項目(探究テーマ設定について・FWのコツ・成果物の形態の工夫・1学期にすべきこと)を必ず伝え、1年生は必要に応じて適宜メモをとり、質問や相談を行なう形式をとった。
- ③ ワークシートを用いた本時の振り返り

## 3. まとめと今後の課題

異学年交流の試みは初めてであったため、意見交換が活発に進むよう、教員から上記2②に示したような最低限共有すべき4つの要素を指定し、また1年生には今後の探究活動をより質の良いものにするために主体的に意見交換に参加すること、2年生には1年生の率直な疑問に快く回答するように呼びかけた。その結果、初めこそ多少の遠慮が見られたものの、意見交換が進むにつれて上級生(探究活動経験済み)と、下級生(これから探究活動を行う)という各々の立場への意識が芽生え、和やかかつ活発な意見交換が授業終了間際まで見られた。本時の最後に、自己の取り組みを5段階で評価(5が最高値)させたところ、「本時の意見交換会を通じて探究の具体的なイメージをもてた」という項目に対する1年生の回答平均値は4.1であった。生徒の自由記述欄にも、「テーマ設定の重要性を実感した」「年間の見通しを早めに立てようと思う」「先輩の探究成果だけでなく、失敗談も聞いたことが収穫だった」等のコメントが見られた。

一方で2年生からも、自分の言葉で後輩にアドバイスを与えたことで、テーマ設定の重要性や見通しをもって活動する重要性を再認識したというコメントが挙げられた。

それらの生徒の様子から、探究活動のコツや留意点について教員から指導を受けるよりも、生徒間の対話から自発的に気づき学びとる本時の試みの可能性が感じられた。ただし時間割等の制約から、異学年交流の機会を頻繁に設けることは困難であり、今回得られた生徒の気づきが、今後1年間の探究活動に充分活かされるためには、講座担当の教員による継続的な指導が不可欠であると思われる。